

## 実行委員長挨拶

生誕百周年記念行事実行委員長 宮崎 毅

このたび、西暦2000年という節目の年に、農業工学改め生物・環境工学分野が生誕100周年を迎えることになり、誠に慶賀に堪えません。この祝賀会を迎えるに当たり、実行委員長として一言ご挨拶申し上げます。まず、この分野の創始者、上野英三郎先生（玄関と会議室に納められている胸像でしか存じ上げませんが）をはじめ、その後100年間、この分野の発展に貢献されてきた諸先生、諸先輩に改めて敬意を表し、感謝申し上げたいと思います。

さて、東京大学における本分野は、最近、過去に見られなかったような変化と発展を見せております。1つは、その名称にも現れているとおり、農業工学という分野を改称して生物・環境工学としたことです。この改称の是非は、研究の発展、卒業生の活躍、学生からの評価、社会的評価などから見るべきことは言うまでもありません。寡聞にして、これまでのところ、特段のご批判は頂いておらず、学生諸君からは歓迎されている（というより抵抗はない）ようであります。

2つめは、この名称変更に伴う研究の拡大発展が挙げられます。これまで文字通り「農業のための工学」として発展してきたものが、最近は「生物と環境のための工学」へと変貌しつつあります。先日行われた修士論文中間発表会のテーマ18件を見ますと、「水田用条間除草装置の開発」のように農業の工学として重要なテーマばかりでなく、「分配トレーサーを用いた地下水汚染物質調査」や「培養小植物体の蛍光画像計測」、「Biogeography Modelを使用した日本における植生分布の予測」など、農業を含む生物と環境の総合的な工学としてテーマが設定されています。教官スタッフの出身分野が農業工学に限らず、農芸化学や地理学、情報工学などに広がっていることも関連しているようです。

3つめは、駒場からの進学生の増加傾向です。駒場からの進学生は、ここ4年間、第1志望ですぐに定員を超過し、足切りをせざるを得ない状況にあります。女子学生の比率も飛躍的に増加しています。最近、専門課程（3，4年生）の授業では、学生諸君の出席状況、講義に対する関心度が向上しているとの評価をしばしば耳にします。

ところが一方、生物・環境工学分野のアイデンティティーが急激に薄まっているとの指摘があります。実際、昔使われていた「一家」意識のようなものは、今ではほとんど聞くことがありません。卒業後の進路も、多様化する一方です。大学が卒業生にアンケートをお願いしても、その回答回収率は、農学部中最低ランクにつけています。残念ながら、毎年の同窓会から足が遠のいている方が多いのも事実です。このことの意味を分析すべきかどうかは分かりませんが、できれば現役生、現役スタッフと卒業生や諸先輩とが情報交換や意見交換を行い、楽しみを共有できるような場と時間を持てれば、これに越したことはございません。

今回、開催を計画した本祝賀会は、以上のような気運の中で開催され、同時に本記念誌が発行されます。生物と環境のための工学を主眼とするこの学、それ故、社会的要請と共に姿形を変えながら、先取りの気運、発展の壮気を抱いているこの学、にもかかわらず、同窓意識、同一専門集団意識が薄まっていると言われているこの学、いったい、農業工学改め生物・環境工学の次の100年はいかなるものとなるのでしょうか？本祝賀会では、記念講演、7号館ツアーと同期生懇談会、そして同窓会パーティーへとつなげることによって、リラックスした雰囲気の中でゆったりとこのことを考えてみたいと思います。

祝賀会実行委員会準備委員長としての責任から解放されることなく本実行委員会幹事長として貢献して下さった後藤英司助教授、同窓会報を編集しつつ、同時に100周年記念誌（本誌）の編集にもあたって下さった芋生憲司助教授、顧問団をおまとめ下さった中野政詩名誉教授、実行委員として熱意を持って準備を進めて下さった中川昭一郎氏、谷山重孝氏、大橋欣治氏、渡辺巧氏には、特にお礼を申し上げます。

以上を持って実行委員長の挨拶に代えさせていただきます。